

人間が人間を理解するために

日本人が日本人を理解するために



写真の世紀 [写真体験66年]

濱谷浩 HIROSHI HAMAYA

1997年1月12日[日] - 3月30日[日]

- 開館時間=午前10時-午後6時(木・金は午後8時まで)入館は閉館の30分前まで
- 休館日=毎週月曜日(月曜日が祝日または振替休日の場合はその翌日)
- 観覧料=一般・大学生=500(400)円 小・中・高校生=250(200)円
企画展との共通観覧料=一般・大学生=1,000(800)円 小・中・高校生=500(400)円
いずれも1日以内は20名以上の団体料金/小学生未満、65歳以上の方、および障害のある方との介護者1名は無料になります(証明できるものをご持参ください)。
- 主催=東京都写真美術館

Tokyo Metropolitan Museum of Photography 東京都写真美術館 [3階常設展示室]
〒153 東京都目黒区三田1-13-3 TEL. (03)3280-0031



①

東京都写真美術館では、日本を代表する写真家を毎年1人ずつ取り上げ、当館コレクションを中心とした個展を企画しています。今年には「雪国」「裏日本」等の代表的シリーズで知られる「濱谷浩」展を開催します。

1915(大正4)年生まれの濱谷浩は、15歳の時に初めてカメラを手にしてから、今年で(写真体験66年)になります。この66年は、人間や人間を取りまく環境、社会情勢などに対して、常に正面から取り組み、激動の昭和期をある時は静かに、又ある時は激しく、写真と共に歩んだ軌跡だといえるでしょう。

東京に生まれた濱谷浩は、銀座を中心にモダンな雰囲気漂う1930年代、下町や都会を生き生きと撮影し、18歳でプロ・カメラマンとして仕事を始めます。その後刻々と戦争へ向かう情勢の中、東方社で対外宣伝誌「フロント」の撮影等もしますが、衝突して退社し、1944年には新潟県の高田に移り、この地で終戦を迎えます。戦前から取材を重ねた「雪国」やその後の「裏日本」撮影の中で、濱谷浩は(人間と風土)について深い関心を寄せます。「人間が人間を理解するために 日本人が日本人を理解するために」という「裏日本」の冒頭に記された言葉は、濱谷浩の生涯のテーマだといえるでしょう。

戦後、高度経済成長が進む中、それまで政治的な取材を控えていた濱谷浩は、60年安保闘争を市民の立場で取材します。約1ヵ月間の記録は「怒りと悲しみの記録」として出版されますが、政治体制や人間に対して強い失望を抱き、人間を拒絶するように日本各地を廻り(「日本列島」)、その後南極やサハラ砂漠など海外へ視点を移していきます。

本展覧会では、第2次世界大戦と60年安保闘争という二つの大きな社会変動時を柱として4つのパートで構成し、濱谷浩が写真家として、また一人の人間として、どのように関わり、取材・撮影していったのかを、作品約140点と関連資料から探っていきます。

会期/1997年1月12日(日)-3月30日(日)

■講演会 「写真家・濱谷浩を語る」
日時/3月20日(木・祝)午後3時-午後5時
当館1階ホール
講師/平木収(写真評論家)
聴講無料/先着200人

■フロアレクチャー
展示期間中の第2・4土曜日の午後2時より、展示室にて担当学芸員による展示解説を行います。



②



④



③



⑥



⑤



⑦

交通機関=JR恵比寿駅東口より徒歩7分(恵比寿ガーデンプレイス内)。お車での来館はご遠慮ください。

東京都写真美術館
〒153 東京都目黒区三田1-13-3 TEL. (03)3280-0031



- ① (原) 原 (原) 原
- ② (原) 原 (原) 原
- ③ (原) 原 (原) 原
- ④ (原) 原 (原) 原
- ⑤ (原) 原 (原) 原
- ⑥ (原) 原 (原) 原
- ⑦ (原) 原 (原) 原

川崎市民センター
川崎市民センター
川崎市民センター